

- 1 教育事業名 「いきいき自然体験キャンプ」～自然にふれ、人とかわり、新しい自分に出会う旅～
- 2 ね ら い 心因性の不登校児童生徒に対して、渡嘉敷島の大自然の中で日常と離れ、普段とは異なる人々と生活・交流し、安心できる環境の中で自然体験・生活体験・交流体験などを行うことで、心身を解放させる。そして自分の新しい一面に出会うことで、日常生活における一歩を踏み出すきっかけとなることを期待する。
- 3 期 日 平成28年9月20日(火)～9月23日(金) 3泊4日
*台風14号のため予備日程での実施となった。
- 4 場 所 国立沖縄青少年交流の家
- 5 募集定員 県内適応指導教室等に通級する児童生徒(小・中・高) 50名程度
児童生徒の関係者(適応指導教室職員・保護者等) 20名程度
- 6 参加人数 60名
- 7 参加者内訳 小学生9名・中学生27名・適応指導教室引率職員24名 (男性28名、女性32名)
- 8 講 師
 - ・伊波謙誠氏(看護師)健康指導
 - ・照屋寛信氏(手作り遊び工房ふぁーかんだー) クラフト・野外活動指導
 - ・米田英明氏(琉球新報社通信員)平和学習指導
 - ・森有紀子氏・比嘉康裕氏・宮國淑氏(スノーケリング公認指導員)スノーケリング指導
- 9 実施プログラム

	7:00	8:00	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00	20:00	21:00	22:00	
20(火)			とまりん 集合・ 受付	とまりん待期 屋食(持参弁当)		泊港 出港 フェリー	移動・休憩・ スタッフ打ち 合わせ	オープニング・ ふれあいレ ク・テント設置		火おこし	夕食(野外炊事)		ゆとりの 時間	ふりかえり	シャワー	就寝 (テント)	
21(水)	起床 朝のリラ ックス タイム	朝食 (軽食)	トカシクの旅～自然からの贈り物～海洋研修・屋食(弁当)								ゆとりの 時間	夕食(野外炊事)		灯りの 時間	ふりかえり	シャワー	就寝 (テント)
22(木)	起床 朝のリラ ックス タイム	朝食 (軽食)・ テント撤 収	トカシクの旅～自然からの 贈り物～海洋研修		屋食 (弁当)		ヒナケンの旅 ～自然と仲間からの 贈り物～		本館へ 移動	ゆとりの 時間	タペの つどい	夕食 (食堂)	ゆとりの 時間	ふりかえり	入浴	就寝 (本館)	
23(金)	起床 朝の 散歩	朝食 (食堂) 清掃	ニシヤマの旅 ～仲間からの贈り物～ 平和学習・チャレンジレク		屋食 (食堂)		ふりかえり	エンディング・ アンケート	移動	渡嘉敷 港出港 フェリー	泊港着 解散						

*1日目は荒天のため泊港10時発予定のフェリーが12時発の繰り下げ運航になり、日程を変更した。

10 事業の様子



テント設置



火おこし



左手は自分の、右手はみんなへの希望



みんなの応援でスイカ割り



仲良くスーパーフロート



海の合間にクラフトを



ヒナクシの豪快な景観



ツボ押しでリフレッシュ



チャレンジレクで盛り上がる

11 エピソード

(1) アンケート・参加者の感想

- ・とても楽しかったです。充実しているなど何回も思いました。(児童生徒)
- ・前回できなかったことが出来たし、チャレンジできたし、チャレンジしたことのほとんどを笑顔で過ごせてよかったです。(児童生徒)
- ・疲れることもあったけど、達成感があってとても全部楽しかったです。(児童生徒)
- ・自分でもやればできるんだと思った。(児童生徒)
- ・子どもたちの成長(自己決定力や挑戦する力など)を促すとてもよいプログラムだったと思います。(引率者)
- ・4日間とてもお世話になりました。普段様々な経験が少ない子ども達に良い機会を与えてくれるこの事業は素晴らしいと思います。また、他の子どもたちや先生方の悩みも共有できて今後の活動に活かせることが多くて良かったです。次年度もぜひ続けてほしいと思います。(引率者)
- ・子ども達が4日間様々な体験活動を通して表情が豊かになったり会話が増えたり変容が見られてとてもうれしくなりました。1つの事が自信へと繋がったんだな〜と実感しました。(引率者)

(2) 事後の沖縄県適応指導教室連絡協議会における報告

- ・エンディングセレモニーで挨拶をしてくれた参加者が、事業後に開催された別の会でも自ら代表挨拶に立候補し、立派に挨拶をした。キャンプをやり通した達成感や挨拶をしたことを仲間や先生にほめられたことが自己肯定感・自己有用感をもつことにつながったと考えられる。
- ・体を動かすことを嫌っていた参加者が事業終了後、毎日筋肉トレーニングとジョギングを行うようになった。年の近い生徒と出会い共に過ごす中で、体を動かす楽しさを教えてもらったことが要因と考えられる。
- ・ある参加者は自分の苦手なことも話せるようになり、人と一緒に食事ができるようになった。キャンプで他の人と寝食を共にできたという成功体験や友達の苦手分野を知ったことで、自分だけではないという安心感を持てたことが要因と考えられる。
- ・何事にも消極的であった参加者が意欲的になってきた。キャンプで年下の子の世話をすることで自己有用感を持てたことが要因と考えられる。
- ・ある参加者は「渡嘉敷島」という場所が自分をとても安心させる場所だとイメージできると話している。心の安全基地ができたことの意義は大きいと感じているようである。

12 担当者所見

(1) 成果

事業終了後の沖縄県適応指導教室連絡協議会にて、9名の児童生徒がいきいきキャンプをきっかけに学校に通えるようになったとの報告があった(チャレンジ登校も含む)。また、修学旅行に参加できた、体験活動に意欲的に参加するようになった、児童生徒の声に張りが出てきた、明るくなった、人との関わりに抵抗感がなくなってきた、周りの変化に気づき、困っている人のフォローができるようになってきた等という良い変容の報告がほとんどすべての参加者についてあった。これらの報告や参加者の感想から、本事業が参加児童生徒にとってかけがえのない体験となり、参加児童生徒の成長を促す一助になったと考える。

(2) 課題

- ・台風襲来の多い時期に実施する事業なので、予備日程を含めた講師やボランティアの参加及び使用施設の確保をする。
- ・「ゆとり」を重視したプログラムであっても児童生徒によっては負担に感じるという声もあるのでひとりひとりの様子を注意深く観察し対応できるような支援を行いたい。
- ・児童生徒を安心してリードできるようボランティアへの事前教育やスタッフによるプログラム進行の打ち合わせを充実させること。